

1. 概要

- (1) 城下町の特質
- (2) 長岡の寺院配置ラインについて
- (3) 慶長十年(1606)頃の主な町割り

2. 堀氏、牧野氏による長岡城の町割り、城下の寺院配置

参考 長岡市中心部の寺院図 (長岡郷土史より)

参考 唯敬寺、長永寺、西福寺のガイドメモ

町割りと関連して、以下の三寺院は、内川河戸に接しており、内川の水運に深く関与していたと考えています。長岡の歴史に関連するトピックスも一緒に説明しました。

唯敬寺さんと長岡の歴史トピックス、補足 内川と新川・赤川

長永寺さんと長岡の歴史トピックス

西福寺さんと長岡の歴史トピックス

堀氏、牧野氏による長岡城の町割り、城下の寺院配置については、

1) 唯敬寺は、江戸時代、現在の十倍を超えるような、ほんとうに広大な境内を持っていたとのこと。
(東西は寺院に関連の長生保育園を含み、南北も今の数倍。)

2) 唯敬寺のほか、以下の寺院は、江戸期には一万坪を越える広さの境内を有しているものが多い。まるで有事の際の出城である。

正覚寺	長岡町、北の守備
唯敬寺	長岡町、西の守備 (内川湊)
光福寺	長岡町の南、及び東の守備

3) 渡里町には寺院が軒を連ねており、町なかには、大きな寺院が殆どないよう見受けられる。

これらを関連づけた春日の個人的な見方が含まれています。しかし、あながち無理な仮説ではなく、高田の寺町、新潟の西堀通りも、基本の考え方は同じだと思います。但し2章で言及しましたが、堀氏の内川下流側先行整備の理由は、何らかの意図があったのでしょうか、わかりません。

歴史学者、郷土史家の先生方による既公表の文献があると思いますが、未だお目にかかるつていません。景観研究としては注(*1)があります。

もうひとつ、これらの寺院は、正覚寺、唯敬寺、光福寺、そして長永寺、西福寺、全て、浄土真宗本願寺派（いわゆる、お西）の寺院です。長岡には、お東の寺院も多くありますのに、この偏在は少し異常です。徳川幕府は、家康の時代から、幕末に至るまで、いわゆる、お東に、ずっと肩入れしてきました。

家康が若いころに、最も手を焼いた勢力のひとつが一向宗であったことを考えると、何かと負担の多い「防衛ラインとしての寺院経営」を、なぜ「お西」寺院に負わせる理由が、何か、あるのでは、と思うのです。長岡など一部の藩だけかも知れませんが、幕府に何らかの寺院管理方針があつて、譜代大名も、それに倣ったのでは、それとも、偶然なのか、もう少し情報探索をしていきたいと思っています。

この他の、昌福寺、興国寺、眞照寺、栄涼寺、長興寺など、ガイドする機会の多い寺院については、長岡の教育の系譜、堀口大學関連、山本五十六記念館、平和関連の話題の文書で説明しています。

尚、これらの寺院は観光施設ではありません。節度をもって、関連するテーマで、ご訪問いただけたらと思います。

(*1) 寺院配置そのものの研究ではないが、repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jpにある論文で、関連の章のみ入手しています。

第3章 都市空間の中の寺院、第4章 寺院の用途転換に関する提案
寺院分布図が示されていますが、都市景観と、その維持を目的とした用途転換からの研究論文です。

1. 概要

(1) 城下町の特質

防衛都市として築かれた城下町において、広い敷地を有する寺社地は、有事の際に兵の駐屯地や防衛拠点として機能することが求められた。

そのため、城下町の寺社は、総構えの入口や曲輪の突出部などに優先的に配置され、ときには一つの曲輪のような機能すら担う場合があった。

(2) 長岡の寺院配置ラインについて

神田の安善寺～呉服町の西願寺、光徳寺～

渡里町・上田町の善行寺、西福寺、妙宗寺、西入寺、長永寺、徳聖寺～

日赤町(大工町)の徳宗寺、園宗寺～

柳原の本善寺、草生津の唯敬寺～

千手の眞照寺、興国寺、千蔵院～

四郎丸の昌福寺、西方寺～

長町から愛宕の栄涼寺、長興寺、正覚寺、正樂寺

戊辰の役当時、唯敬寺は物資集積所、昌福寺は傷病兵の治療所。江戸期の唯敬寺の境内は、現在の寺の東の長生保育園の土地や赤川を囲む、ほぼ正方形の広大な区域であった。

呉服町の西願寺、光徳寺（ともに真宗高田派）については、西願寺は元和二年(1617)に現在の呉服町に移転しているが、開基は親鸞様の直弟子の教名房が常陸の稻田に寺を建立。その後信州を経て長岡へ。

光徳寺は、天正年間の1576年に現在の越路町に開基。

元和三年(1618)に現在地に移る。当初は西願寺の塔頭であったが現在は真宗高田派本山の末寺。

(3) 慶長十年(1606)頃の主な町割り

堀直寄が正覚寺を信州より神田に呼び寄せ、一万坪を寄進。

西福寺は、慶長年間に宮内から現在地。

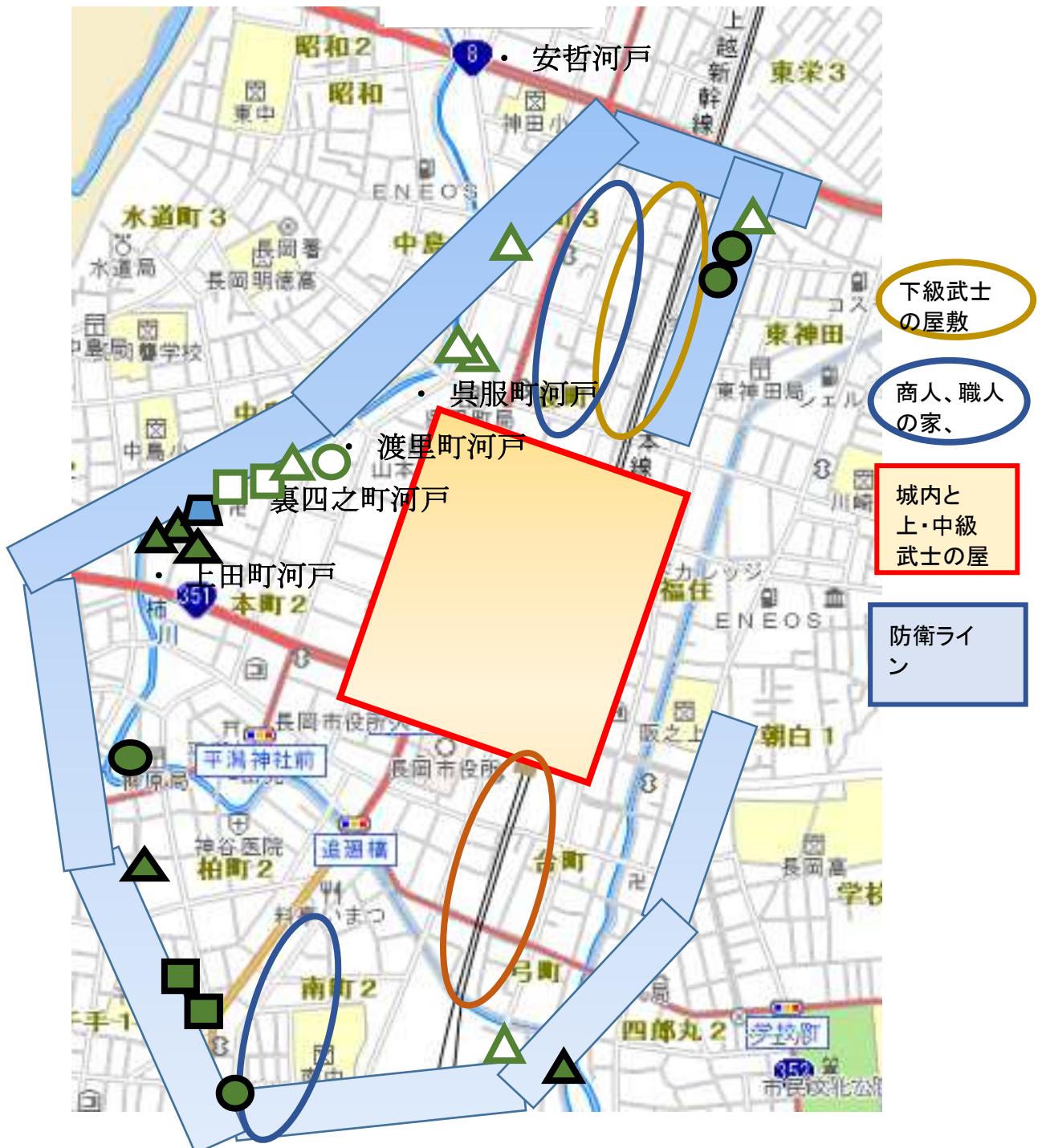
西入寺、長永寺、徳宗寺、園宗寺は、元和元年(1616)、堀直寄により、蔵王から寺町に移転する。

2. 堀氏、牧野氏による長岡城の町割り、城下の寺院配置

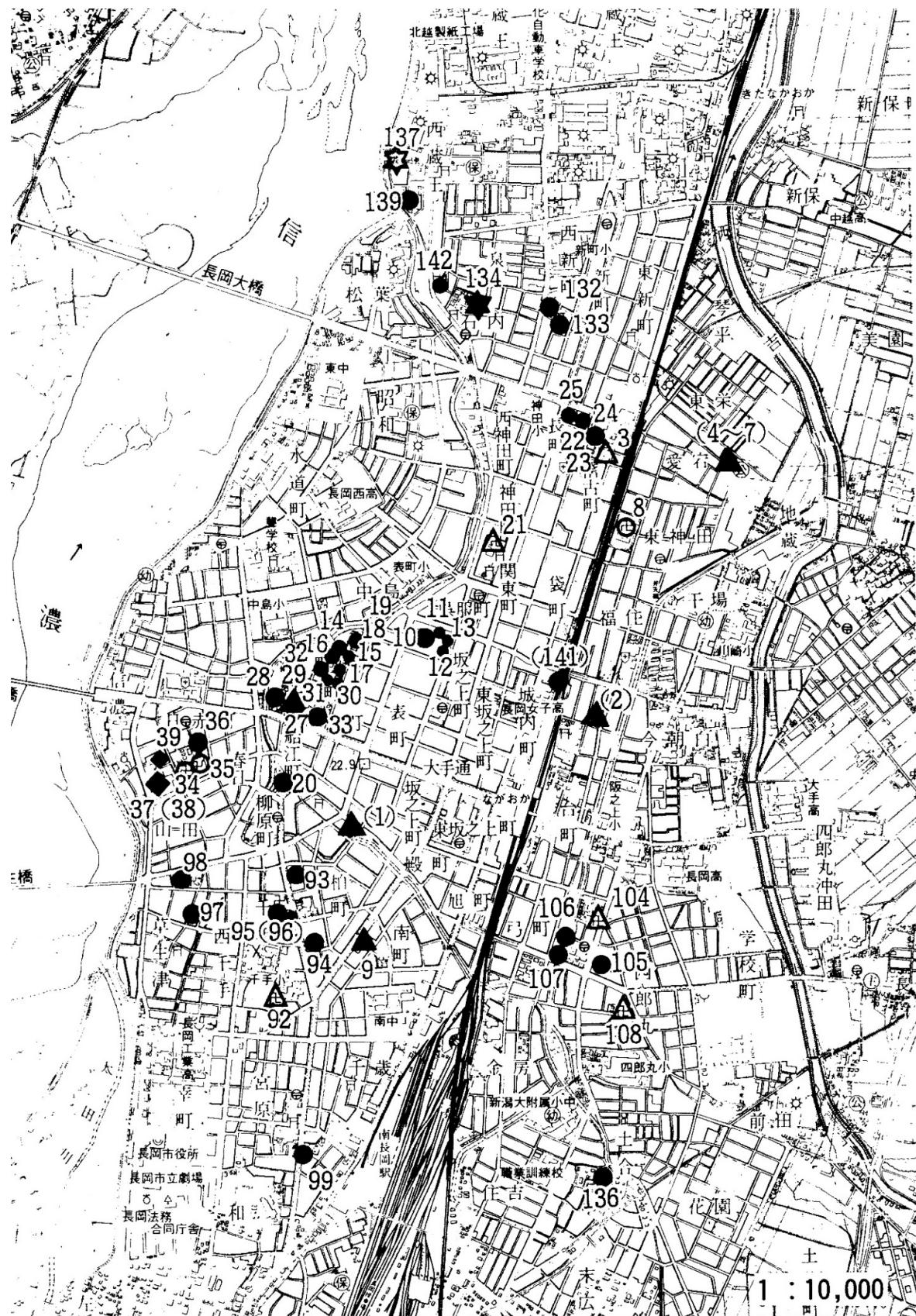
(2020年10月改訂)

	堀氏入府時、前領地より		牧野氏入府時、前領地より
	堀氏入府時、蔵王より		牧野氏入府時、蔵王らより
	堀氏入府時、蔵王以外より		牧野氏1650頃、御蔵建設で寺町より移設

○、□、△の白、緑で。堀氏、牧野氏の順に、前領地より、蔵王より。それ以外よりの移転を示します。堀氏の時代、まず大手門のラインより下流側の防衛線を先行で確保したことが読み取れます。何らかの意図があったと思われます。



参考 長岡市中心部の寺院図



参考 唯敬寺、長永寺、西福寺のガイド 春日 2019年7月

1. 町なかの、いくつかガイドしたい寺院

これらのお寺では、話が多くありますが、長岡の二度の戦火などにより、文書が殆ど残っていません。西福寺の住職様にもお聞きしましたが、「確かなことは残念ながら、わからないのです」、ということでした。しかしながら、それぞれ、長岡の歴史と深くかかわる、多くのトピックスをもつ寺院です。

とりわけ西福寺様は、ひとつのお寺にまつわる話題だけで、江戸、さらに明治・大正・昭和までの、長岡観光のキーポイントの案内ができるほど、話題豊富なところなのです。

唯敬寺さん関連

- (1) 江戸末期に、上田町から現在地へ
- (2) 赤川と柿川
- (3) 戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所
- (4) 明治初期、長岡花火のはじまり
- (5) 星野嘉保子の星野家菩提寺

長永寺さん関連

- (1) 城岡からの移転
- (2) 長永寺恵禪住職と私塾「囂外齋」
- (3) ビハーラ

西福寺さん関連

- (1) 開基の恵信師
- (2) 宮内村からの移転
- (3) 江戸時代の蒲原舟道の管理
- (4) 北側の山門、薬医門
～ 小島谷・久須美家の新潟経済への貢献
- (5) 相馬御風の「維新の暁鐘」の歌碑
- (6) 宇吉も入る、表町・岸家のお墓
- (7) 日本酒製造への貢献（お福酒造、吉之川）
～ 長岡の酒造りの先進性

(1) 江戸末期に、上田町から現在地へ

唯敬寺の開基は信州松本ですが、江戸時代になる前、長岡の上前島に移り、そして忠精公の頃に上前島から上田町に移ります。

(大手通から長永寺さんに曲がる、角のあたりのようです。)

～長永寺さんのあたりが上田町河戸になりますので、城の入口の町口御門とは100mほどの距離です。

さらに江戸時代の終わりになって、長岡藩御用蔵の拡張のため、赤川町(北文治町)と呼ばれた現在地に移転。梅鶯山、妙法山ふたつの山号

(2) 赤川と柿川

保育園の建物とグランドの間を通っている川は赤川とよばれています。

赤川の上流は工業高校の西を通っています。その先は暗渠のようです。

下流は内川の柿川に流入していまして、場所は柿川戦災殉難地の碑のある柳原町の柳原公園の近くです。

柿川は江戸時代、信濃川に繋がる長岡船道(ふなどう)と呼ばれる水運の拠点でした。従って、赤川は内川を使った水上物流の終点に当たるのです。「内川と新川・赤川」の関連図を次頁に示します。

(3) 戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所

さらにその後、幕末の数年前、長原町(現在の草生津)に移転し、門前町の開設にも参加したそうです。長原町の寺院の位置は不明です。

寺院の現在地は、保育園を含めると広大な敷地ですが、そのころの唯敬寺境内は、いまの4、5倍はあったようですので、たぶん、そのなかのどこかでしょう。戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所となって、炊き出しを行なったとされています。

～おそらく、上田町河戸から赤川に入り、そのまま長原町の唯敬寺境内に兵糧運び込んだのでは、と思われます。

(4) 明治初期、長岡花火のはじまり

長原町は石打町と並んで「南廊の長原町」、「北廊の石打」と呼ばれるほどの歓楽街となりました。このころ、唯敬寺境内の水子供養の地蔵様を供養するために打ち上げた花火が、長岡花火のはじまりという説も、あります。千手町八幡様のお祭りが最初という説も有力ですが。

(5) 星野嘉保子の星野家菩提寺

星野嘉保子については、「長岡の教育」などで今まで何回か話題にとりあげていますので、省略します。

悠久山にある星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」のもとになった、西園寺公望の揮毫になる書が、唯敬寺さんの本堂に、掲げられています。

補足 「内川と新川・赤川」

(C) 春日

(長岡市史・通史前編、長岡歴史事典を参考にしました)

(1) 江戸末期の藩政改革と内川河戸の周辺開削

1855-1856 (安政2-3) 財政改革、機構改革に着手。(安政の改革)

1857 (安政4) 渡里町裏と草生津村を結ぶ掘割り、赤川が完成

長岡船道の財政改善のため、623間の掘割りを開削。

1863 (文久3) 藩主忠恭、老中に任命され、12月24日外国事務取扱

1865-1868 繼之助による慶応改革 (軍政、家禄、藩学、その他諸改革)

1867 (慶応3) 12月 藩主忠訓上京。朝廷に建白書を提出。

同月、長岡船道・肴屋等の一部品目の株を廃止。

1868 (慶応4) 5月開戦、赤川を使って唯敬寺を兵站基地とする。

(2) 維新後の内川と信濃川水運

1874 (明治7) 新潟の企業家が川汽船会社設立、新潟・長岡間航行開始。

その後、長岡、小千谷の商人も会社設立、信濃川本流の運行活性化、
～1854年の横浜・黒船来航から20年後に信濃川で運行という速さ。

運行時間、1日日は上り11時間、2日日ほ下り8時間。

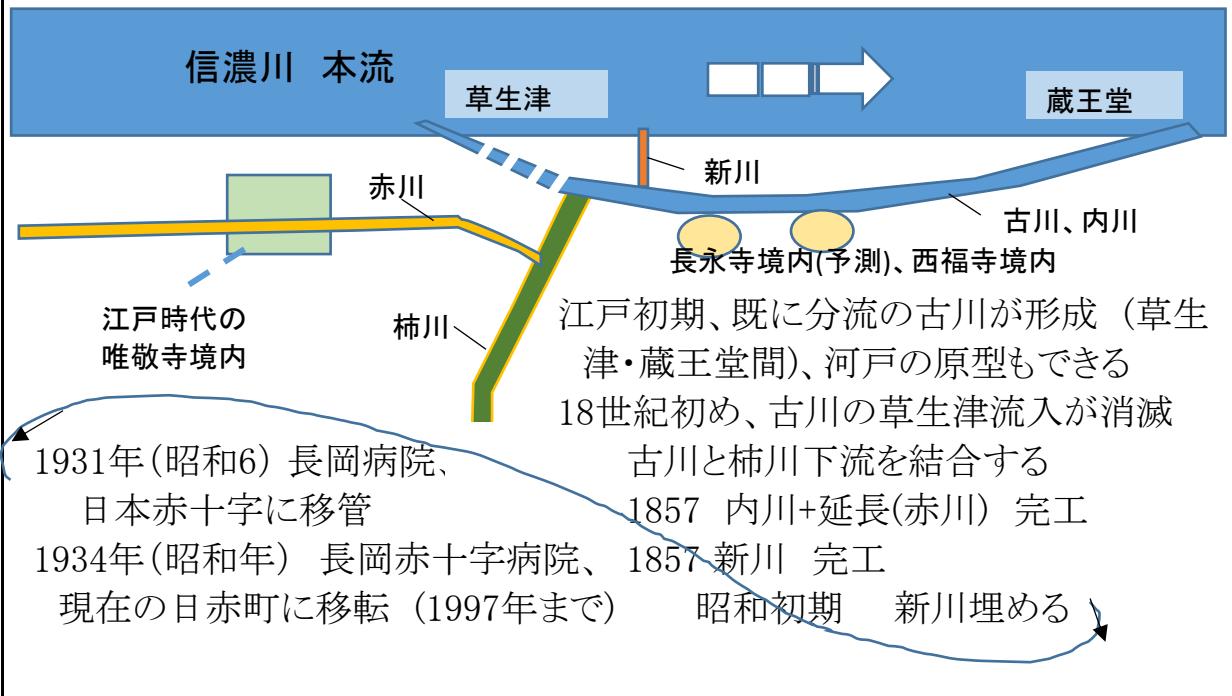
運賃は一番高い新潟一長岡で56銭、今日の米価換算でおよそ3,500円程度。

(H18 新潟市合併記念講演会議事録資料より)

～これまで上り4～5日、下り2日を要した和舟に比べて劇的な変化。

- ・蒸気船の登場で信濃川が水運の主力になり、内川の川岸は、やがて
東山、西山から産出する原油の製油所に変わっていった。
- ・今も赤川は、唯敬寺に隣接の長生保育園の敷地内を流れ、現在の赤川の
起点から工業高校まで距離は600m、その先は地下水路。)

(3) 古川、内川、新川、赤川の変遷の簡略図



内川と内川河戸の補足

内川(柿川)上流の草生津から内川出口の蔵王の間に、内川河戸と呼ぶ船着場が置かれました。

その河戸を守るのも、各寺院の役目だったと思います。

掘直奇は、信濃川を往来する船の荷物を取り扱わせる定法をつくり、牧野氏はさらに番所を設置しましたが、寺院も移転などにより町割り計画のひとつだったはずです。

安政年間(1854~59)には、安哲・重右衛門・呉服町・裏四ノ町・渡里町・上田町の六カ所に河戸が設置され、船着場ごとに接岸する船が決められていきました。渡里町河戸、上田町河戸には、長岡藩の蔵が置かれ、荷物の出入りの管理も行ないました。

上り下りの荷物は全部船着場に止めて積替えを行ない、新潟へ、魚沼地方へと、物資を運びました。

新潟から長岡までは大型船、長岡から信濃川で十日町まで、魚野川では六日町まで、渋海川は塚山・小国まで船の交通がありました。

塚山は、広田峠と接しており、柏崎の物産も船に乗せられたものと思われます。

長岡藩は新潟の町も受け持ち、その間の水運を支配しました。まさに長岡は、中越全域の信濃川船道と新潟湊を支配下におき、莫大な収益をあげたと思われます。

(1) 城岡からの移転

長永寺さんも、開基は信州で、慶長12(1607年)年に信州から現在の長岡市城岡付近に移り、さらに元和元年(1615年)堀氏の長岡城下整備により現在地に至っているそうです。

(2) 長永寺恵禪住職と私塾「囂外齋」

木曾恵禪(1815-1896)

17代住職恵涯師の長女木曾操子(みさこ)師が、1839(天保9)年西蒲原郡砂子塚の本願寺派長宗寺より、恵禪師(1815年生まれ)を24歳の時を迎えて、18代住職となりました。

恵禪住職は漢学、宗学、天台華厳を越後学派僧(そう)朗(ろう)学んだ後、京都の学林で仏教を学びました。長永寺入寺後、1845(弘化2)年に境内に私塾「囂外齋(こうがいこう)」を開設し、僧俗の子弟に仏学や漢学を教えました。この囂外齋は操子坊守、長女の展子(のぶこ)師が恵禪住職を助け共に教育に当たりました。

三人の業績は後に「木曾三先生言行録」として出版されました。

恵禪師は資質穏和にして学徳高く、生涯をお念佛の繁盛と人材育成のために尽くされました。囂外齋は明治32年文部省の私立学校令により学則を更迭し、後の恵(え)然(ねん)・昨(さく)非(ひ)住職へと受け継がれてきました。囂外齋の主な出身者に、弓波(ゆみなみ)瑞(ずい)明(みょう)(龍谷大学学長)、小野塚喜平次(東京大学総長)をはじめ、学んだ子弟は4千名、卒業者は9百名を数えました。長永寺の本堂は、慶応元年(明治元年1868年)戊辰戦争の兵火に焼かれ消失しました。

以上、長永寺のウェブページの同寺歴史を参考にさせていただきました。

恵禪師は、長岡に養子に来たばかりの野本互尊翁 野本恭八郎を学問に誘い、その後、妻と三人の子女が通ったと、稻川さんの「互尊翁 野本恭八郎」に書かれています。

(3) ビハーラ

1987年に「ビハーラ活動」が浄土真宗本願寺派を中心に始まりました。長岡は、日本で最初にビハーラ病棟のある病院ができた町です。長岡西病院では、浄土真宗本願寺派をはじめ仏教各派の僧侶が協力して、ビハーラ活動をしています。各寺院でも様々な活動をされておりまして、長永寺さんも、「がん患者と語る会」などで、積極的に活動されています。

西福寺さんと長岡の歴史トピックス

(1) 開基の恵信師 ～ 越後への浄土真宗布教の歴史

西福寺開基の恵信師は、福井にて当初真言宗のお寺を創建したが、後に親鸞の直弟子となり、西福寺と改めたという。現在も、浄土真宗本願寺派の寺院である。真宗寺院として、全国的にも古い方からベスト10に入るのではないか。次に述べるように、寺の場所を転々としてきました。もし初期の地域のままであつたら、現在全国に残る親鸞直弟子の来歴をもついくつかの寺院と同様、大きな本堂をもつ大寺院になっていたのではないか、と思っています。

(2) 宮内村からの移転 ～ 長岡城町割りと長岡町の寺院配置

天正年間（1573-91年）一時期に大積を経て、宮内村に移り、さらに慶長年間（文禄の後、元和の前。1596年から1615年）に堀氏の招きに応じて当地に移転され、また一時は都野神社の末寺であったとの説もあります。長岡の市街地にある寺院の、堀氏・牧野氏入府と寺院移転の来歴を調べると、見事に、城を囲むような配置になっていることがわかります。広い境内をもつ寺院を、いざというときの兵站地、城の防衛線のひとつにしたと思わざるを得ません。

(3) 江戸時代の蒲原舟道の管理 ～ 蒲原舟道と新潟蒲原往来の重要性

一時期、新潟からの蒲原舟道の管理を担当されたそうで、川筋の有力寺院であった。蒲原舟道と新潟蒲原往来は、新潟湊と長岡を結ぶ大動脈で、長岡藩にとって、三国街道とともに、生命線だったはず。その舟道管理を担当させられるのであるから、本寺に、如何に「影響力」があったかということだと思う。

(4) 北側の山門、薬医門 ～ 小島谷・久須美家の新潟経済への貢献

元は江戸期後半に小島谷の久須美家が藩主から拝領した山門で、その後に山田家に譲渡されたものが、昭和になって第二室戸台風で倒壊。それを、当時の西福寺住職が文化財保護のため、購入移築したこと。

これに関連して、普段ガイドで話の出ない久須美家にも触れたいです。久須美家は、小国の中口家、塚野山の長谷川家とともに、鉄道施設・銀行経営を中心に、新潟経済に大きな貢献をした旧家です。久須美東馬氏が寄贈した弥彦公園入口に氏の銅像が立っています。久須美家和島の別邸・住雲園とともに、もっと観光コンテンツとして注目されていいように思います。

(5) 相馬御風の「維新の暁鐘」の歌碑 ～ 戊辰戦争史

北越戊辰戦争では、長岡藩が落城した慶応4年(1868)5月19日の早朝に、西軍が信濃川右岸に上陸したとき、この鐘が乱打されたといいます。

相馬御風の「維新の暁鐘」の歌碑（設置年月は昭和29年5月）

「よはあけぬ さめよおきよと つくかねの ひびきとともに ちりしほなばや」
この歌の印象として、官軍側からの印象を詠んだ歌のように、感じます。

御風さんが、この歌を詠んだ時期、そのときの同行者、御風さんのこころ、さらに当時の長岡の住民感情など、知りたいところであるが、残念ながらわからない。

(6) 宇吉も入る、表町・岸家のお墓の位置(下図) ~ 長岡への宇吉の貢献

表町の岸家は、江戸期に横枕の岸家(現・お福酒造)から分家。現存する墓石は、天保15年(1844年)に建立、墓石左面に岸卯吉と刻されています。山本五十六記念館に、明治期の当主宇吉の長男・吉松さんが渡米生活時、自身の農園内に噴出した油田に、五十六を案内している写真があります。

岸宇吉(1839~1910)は、山本平蔵の四男として新潟に生まれ、12歳で、長岡の表町一の町の呉服商、岸屋の養子となつた。翌年、養母の勧めで小林虎三郎の教えを受け、16歳で、長岡町で初めての唐物商に転じた。妻セキは、横枕の岸家・本家より嫁いだ。「ランプ会」を立ち上げ、殖産興業の発展に尽くすなど長岡の経済界をリードした方であり、もっと評価されていいと思います。

(7) 日本酒製造への貢献(お福酒造、吉之川) ~ 長岡の酒造りの先進性

本家の岸家でも、大きな変化があり、明治30年(1897)、今に続く酒造りを創業しました。創始者の岸五郎は、軟水のハンディを克服する技術の体系化に尽力するとともに、初めて酒母製造に乳酸を添加応用し、現代酒造りの基本となる「速醸もと」として広く全国で使用されている技術の基礎をつくり、国内酒造業界に大きな貢献をしています。

摂田屋の吉之川も、麹の自動製造装置の開発、発酵過程の90Kリットル大型タンクの使用など、酒造りの労働条件改善に直結する製造技術開発に貢献し、また新しい日本酒開発のための麹製造受託を行ない、全国の酒造業界に貢献しています。このような酒蔵が狭い範囲に並ぶのは、奇跡だと思います。

